Si je tombe dans l'amour avec vous

篠宮　かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｉ　ｊｅ　ｔｏｍｂｅ　ｄａｎｓ　ｌ'ａｍｏｕｒ　ａｖｅｃ　ｖｏｕｓ

【Ｎコード】
Ｎ９８９５Ｘ

【作者名】
篠宮　かおる

【あらすじ】
他サイトに別名で掲載していた作品を、題名をフランス語にして、加筆修正をした物です。

夫は社長、妻は一般社員。
二人の関係は崩壊寸前。

「お願い、私を愛してるなら別れて・・・。」

不器用な夫婦のラブストーリー。

♪、０　動き出した歯車。（前書き）

お引っ越し作業中です。

♪、０　動き出した歯車。

＜愛してる＞

そんな言葉は、私達夫婦の間には、最初から存在していない。

左薬指でさりげなく輝く指輪は、物言わぬ冷たい鎖。

その鎖に刻みこまれている言葉は、想いの籠っていない愛の言葉。

――Ｌ'ａｍｏｕｒ　ｑｕｉ　ｅｓｔ　ｄｅｓｔｉｎ？――

真実味のない、当てつけの様な言葉。

日本語に訳せば＞運命の恋＜。

フランス語にしてあるのは、私に対する嫌味。

私、菜々宮（ななみや）　吉乃（よしの）、２６歳は、結婚して三年目の、どこにでもいそうな普通の一般社員。

それに引き換え私の戸籍上の夫は、今、最も世間で話題の中心になっている若手実力派の社長。

見た目も然ることながら、言動から視線まで、全てが最高品質で、文句のつけようのない所がまた逆に腹立たしい所。

鋭い眼は、常に私以外を見つめていて、微かに掠れ、良く響く甘い声は、ベットの中で聞けば、程よい甘さを含む媚薬にも匹敵し、魅了される。

そして、ガッシリしている割には、決して太っていない鍛え上げられた身体。

それで35歳となれば、玉の輿を狙っている女性社員にとっては、最高の獲物である事は間違いない。

きゃあきゃあと、やけに煩く、甲高い媚びた奇声をあげる先輩達を尻目に、私は与えられた仕事を全うしようと、美女の集団に囲まれている夫を見て見ぬふりをし、その横を堂々と通り過ぎた。

家では夫婦でも、一歩でも家から出れば、その瞬間から私達は他人になる。

（まぁ、家でも他人だけどね・・・？）

そんな事を思いながら、歩いていると、声を掛けられた。

「あら、菜々宮さん。アナタいつからそこにいたの？」

全然気付かなかったわ。

と、勝ち誇った笑みを浮かべ、小馬鹿にされ、蔑まれるけど、もうそんな程度の幼稚な虐めでは何とも思わないし、感じない。

逆に、そんな事しか出来ない人を憐れみたくもなる。

（どこがいいのよ、あの人の。）

でも、言い返し、反論するのも面倒だし、億劫。

なら。

「すみません・・・。」

小さく、怯えた声で謝り、頭を下げ、下に俯いて走り抜ける。

それが愉快だったのか、女性の甲高い声が聞こえた。

「アレでも同じ女かしら。見た？あの子、今日は化粧すらしてなかったわ。」

大袈裟に声をあげ、私をバカにし、優越感に浸っていた女性は、自分の隣に立っていた男性に甘えるように凭れ掛った。

その男性は、私が勤務している会社の現社長であり、戸籍上の私の夫である、綾橋（あやはし）　智（さとし）さん、３５歳。

でも、胸は痛まない。

そんな光景に胸を痛めていた可愛い私は、結婚して２ヶ月目にして死んでしまった。

今では涙も出なければ、溜息さえ漏れない。

「吉乃、大丈夫か？顔色悪いぞ？」

出勤して早々、疲れ果てて頭を抱えていた私を気遣い、声をか掛けてくれたのは、同期で入社した営業部のエース・長瀬（ながせ）　類（るい）、２８歳。

同期の誼で、私が営業部から総務部に異動した今でも、こうして仲良くしてくれている。

（いけない、今は会社なのに・・・。）

気付かれないように、そっと自然に笑顔を浮かべる。

「類は今日も、相変わらず朝から元気ね・・・？」

「まぁ、営業は体が資本だからな。それより、本当に大丈夫か？お前また痩せたんじゃないのか？」

節だった指が、私の頬を滑っていく感覚が懐かしくて、不覚にも泣きそうになってしまった。

お互いが大切過ぎて、親友以上になれなかった私達。

後悔していないと言えば嘘になるけど、今の私は、昔の弱い私じゃない。

彼にも、彼の人生がある。

大きな手の平に手を絡めるように手を重ね、私はもう一度笑顔を浮かべた。

「大丈夫よ？私には愛する旦那様がいるから。類は知ってるでしょ？」

嘘。

愛なんかない。

だけど、類は優しいから、だから嘘を吐く。

あの人に対して抱いている感情があるとするのならば、それは深い深い諦めの様なもの。

愛しさもなければ、悲しさや憎さも感じない。

『無関心』と言う言葉が近いだろうか。

密やかな逢瀬を終えた私は、パソコンに向かい、ひたすらキーボードを叩くように弾く。

緩くウェーブが掛かっている柔らかめの長い髪が、他人の視線か

ら私の表情を覆う様に隠す。

さっき、類に「痩せたんじゃないか？」と、指摘された時は驚いて、一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう位、驚いた。

確かに最近、私は最近痩せた。

でも、バレるとは思ってもなかった。

（あの人は気付かないのにね・・・。）

近しい人より、昔の想い人が私の変調に敏いなんて。

私が痩せる理由は拒食症気味による少食で、その拒食症気味の原因は、環境の変化によるストレスと、心因性のものだと病院で判断された。

私を担当してくれた先生は、そのストレスの原因を取り除かなければ、後々、私が悲しむ事になると、はっきり断言した。

そして最後に、精神科の先生も紹介してくれて、くれぐれも興奮しないようにと、注意した。

ふと、顔を上げ、何気なく辺りを見回した私は、見たくもない光景を目にしてしまい、無意識の内に唇から血が出るほど、強く噛み締めていた。

（あぁ、やっぱり。結婚なんてしなければよかった。）

私が偶然にも見てしまったモノは、戸籍上の夫が、綺麗で、魅力的な女性とキスしている所だった。

結婚して、今年の１０月で三年。

それは結婚した時から、僅かに軋み、隙間だらけだった私達夫婦の擦れ違う歪んだ関係が、いよいよ変化する刻(とき)を悟り、今にも大きく動きだそうとする瞬間でもあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9895x/

Si je tombe dans l'amour avec vous

2011年10月28日14時11分発行